

在野を巡るフィールドワークの史的素描

—『あるくみるきく』をめぐる民家・集落調査の建築史的再考—

早稲田大学 理工学術院
中谷礼仁研究室

本間 智希

今和次郎 宮本常一 村の見方・調べ方
『あるくみるきく』 TEM 研究所 デザインサーヴェイ

0. はじめに —研究目的と方法—

これまで日本の民家研究は、戦後の建築史学主導の「復原編年調査」によって、建築当初の原形に復原された建造物を行政が文化財として保護することが主目的であった。集落や街並みも同様に建築史学と行政による保護が進められてきた。その成果と課題は、昨今関係者らによって総括されている。そもそも、建築分野における民家・集落研究は大正期、今和次郎(1888-1973)らによって始められたが、それら戦前の研究は、戦後の建築史学において未体系と位置づけられてきた。本研究はこのような背景を端緒に、行政が主体ではない、言わば「在野」の活動体による民家・集落調査を研究主題とし、民俗学者・宮本常一(1907-1981)率いる日本観光文化研究所(以下:観文研)と、その定期刊行物である『あるくみるきく』(以下:〈あるく〉)に着目し、〈あるく〉に掲載された建築系フィールドワークの歴史を辿る。在野における民家・集落調査がどのような目的意識のもと、どのような調査方法でおこなわれ、調査地域に何をもたらしたのか。よって本研究は、次の3点を研究目的に定め、論考する。

- ①これまで未着手の〈あるく〉の整理・分類・分析を通して観文研の活動形態を明らかにする
- ②〈あるく〉内の建築学科OBによる民家・集落フィールドワークの道程と展開について、文献精査だけでなく関係者へのインタビューを実施し、その後の道程を明らかにする
- ③考察として、彼らの人的ネットワークから在野の活動体に共通する問題意識や視座を紐解き、建築史学における民家・集落フィールドワークを周縁から再考することで一つの道筋を探る。

1. 宮本常一と日本観光文化研究所

1-1. 宮本常一の地方への眼差し —世間師と観光文化—

周防大島の農家出身の宮本は1934年に民俗学者・柳田國男(1875-1962)と出会い民俗学の知遇を得る。また翌年には、「日本資本主義の父」と称される澁澤栄一の孫で、後に日本銀行総裁を務めた澁澤敬三(1896-1963)と出会い、澁澤が主宰する私設博物館「アチックミュージアム(以下:アチック)」に入所、宮本は54歳まで23年間居候生活を送りながら、澁澤から物心両面から多大な援助を得る。〈心意現象〉を重視した柳田の民俗学に対して〈物質文化〉である民具を対象にした澁澤の研究を継承して、宮本は柳田の限定した民俗学だけでなく、生活誌全般に研究対象を広げた。澁澤からの経済的援助がなくなった戦後、宮本の旅は講演で稼ぎながら自ら農家という出自を活かした農業技術指導の旅にシフトしていく。宮本自ら各地の篤農家から技術や経営を学んでは他地に伝え歩く姿は、宮本が代表作『忘れられた日本人』で言及した、奔放な旅をしては旅先で得た知見を地域に還元していく「世間師」そのものであったと言える。また宮本は、中央政府や資本家の外部観光資本による開発計画が地方の主体性を奪う観光ブームに対して「国内植民地」と非難し、観光を単に経済効果でなく地方の文化的・経済的な自律を助ける「地域づくりの一環としての地域交流」と捉えていた。1965年、57歳の宮本は武蔵野美術大学の教職で初めて定職に就き、自主ゼミ「生活文化研究会」を立ち上げ学生とともに民具収集や地誌編纂などおこない人材育成に傾倒する。



fig.1 宮本常一(1962年6月撮影)

1-2. 日本観光文化研究所の諸活動

1966(昭和41)1月、宮本は近畿日本ツーリストの馬場勇副社長と当時の観光ブームに対して、地域開発と観光開発の両立を掲げ、ツーリストの内部組織に日本観光文化研究所を発足させる。観文研は、観光資源の開発、



fig.2 観文研のメンバー(1970年1月撮影、筆者加筆)

地方文化の保存、観光自体の究明における体系的な調査研究を活動目的に掲げ、宮本の長男・千晴(1937-)が嘱託で事務局長となり、常勤職員1名の他は所員十数名、宮本のそれまでの人脈から各地の郷土史家に協力を呼びかけ地方同人120名余という構成で研究活動をスタートする。観文研の組織体勢は、以下のようにまとめられる。

- ・研究所の出入りは自由で、所員・同人の境界も自称で曖昧
- ・最小限の嘱託所員を置くが、原則として給料を支払わない所員によって各業務を自主的に運営
- ・所員は計画立案および予算、運営に関して発言権と業務計画遂行の責任をもつ(ツーリストの常務会で年度計画や予算はチェック)
- ・研究は執筆の原稿料以外に報酬は支払わず、調査はフィルム代と宿泊・移動費だけツーリストが負担

このように観文研の組織形態は、柔軟かつ無報酬の活動形態が大きな特色と言える。故に、所員たちは基本的に本職があった。(fig.10)彼らの道程をまとめた『観文研・二十三年のあゆみ』より、観文研の活動内容を「調査研究」「刊行・公開」「実践」に分類し、以下のように関係性をまとめた。

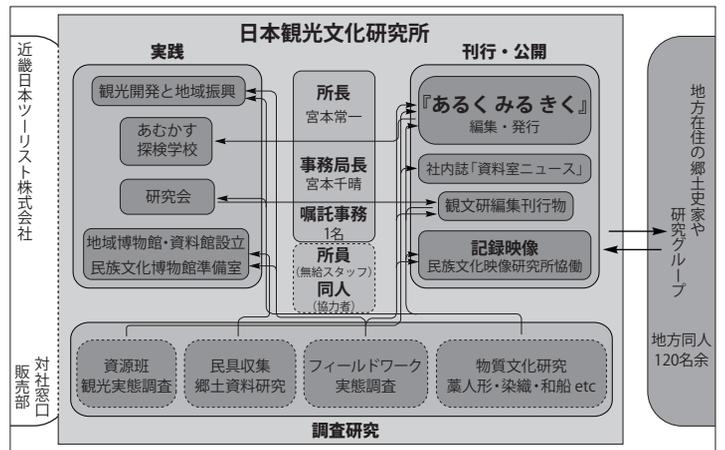


fig.3 日本観光文化研究所の活動形態図

上記のように柔軟な活動形態であった観文研は、所員である原則無給の若者たちが旅という形で各地を歩き、各々の興味分野・調査地域・フィールドワークのスタイルによってそれぞれの活動が緩やかに繋がりながらも「調査研究」「刊行・公開」「実践」を展開し、在野の活動体として1989年の閉鎖まで地域振興の潤滑油としての役割を担った。

1981年に死去するまで非常勤の所長をつとめた宮本は「資源は見つけることで生きて来るし、生かされる。そしてそういう工夫が生活を向上させる」と述べているが、観文研の活動は、所員ら自身の旅の追究である同時に、彼らによって「生かされる資源」を地域から丹念に見つけ出し、旅の積み重ねから深めた知見と経験を活かして地方社会の自律と生活の向上に資することに視座があったと言える。

2. 『あるくみるきく』

2-1. 『あるくみるきく』の基礎研究

観文研の活動の中でも一貫して刊行された〈あるく〉(1967-88)を研究する。〈あるく〉は特別号2冊を含む計265冊が刊行されたが、今までいかなる分野においても研究対象とされることはなかった。その要因は以下の3点が考えられる。

1. 一般的な書店が販路でない為に全号が保管されている事が極めて稀
2. 観文研の元所員・同人たちの多くが今も現役で活動している
3. 旅行会社傘下及び「観光文化」という印象に対する一般的な評価

本研究では、観文研初期から所員の民俗写真家・須藤功氏(1938-)所蔵の〈あるく〉を参照し、まず全号の表紙を撮影、目次や判型などを整理し総目録を作成した。これにより、各特集における執筆者や、全号を通して〈あるく〉の誌的性格の変遷が明確になり、今後の研究資料として活用できるようになった。



fig.4 『あるくみるきく』



fig.5 『あるくみるきく』全号(須藤功氏蔵)



fig.6 『あるくみるきく』全書影



fig.7 『あるくみるきく』発行部数の推移

〈あるく〉の初期の基礎的情報を以下に整理する。

- ・販路は原則として近畿日本ツーリスト営業所直販のみ
- ・配布先はツーリストの協定旅館連盟が主で、教育機関にも配布された

判明している号の発行部数や定価・年間購読料の推移を確認すると、37号(以降:〈37〉と表記)から第三種郵便物認可を獲得し一般販売化、号を重ねるにつれて、それなりの部数が配布されていたことが分かる。また〈あるく〉の編集方針は『観文研・二十三年のあゆみ』より、以下にまとめられる。

- ・総花的なガイドブックではなく一号ごとにテーマを変える総特集形式
- ・既成の文筆家や写真家を使わず、編集やデザインも含めて所員や地方同人の若者を中心に、各号テーマに沿って適材適所で担当を替える
- ・筆者・カメラマンによる自由な「旅」を通して、重点的に取り上げた素材をもとに旅人の発見を語り、読者の発見をうながす
- ・ポピュラーな見せ場からその周辺に存在するものを普遍的に平明に、しかし格调高く語る新しい紀行文を作ることを全体のスタイルとする

最初の一年のみ同友館の福永文雄が編集を担当するが、以降千晴を中心に編集者は変遷する。〈あるく〉は、宮本の中で持ち運びやすくビジュアルが豊富な『岩波写真文庫』が判型のイメージにあり、また〈100〉内で、宮本も執筆や監修をしたエッセイ・スタンダード石油株式会社発行の『energy』に刺激を受けたと述べた。



fig.8 『energy』

2-2. 『あるくみるきく』の内容と推移

『あるくみるきく』の初期の特徴として〈1〉から〈58〉において、山崎禪雄(1943-)ら早稲田大学東洋史大学院生を中心とした資源班が、観光資源「〇〇選」を連載し観光実態調査をおこなった。また〈あるく〉友の会として、東京農大探検部創始者の向後元彦(1940-)が発起人となり「あるくみるきくアメーバー集団」(通称:アムカス)を結成、都立大山岳部出身の千晴や早大探検部の伊藤幸司(1945-)ら全国の探検部・山岳部OBによる〈あるく〉読者の参加型探検学校が国外を中心に開催された。

〈あるく〉内で、民家・集落・街並を取り上げた内容はfig.9にまとめた。全号を通して最も多く取り上げているのは、法政大学の建築専攻で修士課程を修了した谷沢明(1950-)である。谷沢はおもに単身の調査スタイルで瀬戸内海を中心に日本各地の街並の平面・立面の図面を網羅的に採集している。また、他の内容も旅の途上に実測した民家を紹介する内容が多く、紹介にとどまっている印象がある。

(号)	タイトル	担当者
〈31〉	草屋根 会津茅手見聞録	相沢昭男
〈38〉	民家をみよう 建築を追って	倉田(石山)正子
〈57〉	アジア西・南緯の建築たち	相沢昭男
〈64〉	山古志 家を見ることがから 奥能登の村	星野紀夫
〈65〉	能登周辺の民家	須藤護
〈74〉	まがりやの街道集落	倉田(石山)正子
〈83〉	豊永の民家	五百沢智也
〈102〉	まんじゅう買いに行つて、見つけた民家七軒	谷沢明
〈105〉	佐渡を訪ねて二船と小木町の村	TEM 研究所・真島俊一
〈109〉	奥会津の村 針生の生活誌	須藤護
〈134〉	連載「日本の町並」全24回	谷沢明
〈139〉	バリ島新婚探検記	真島俊一・真島麗子
〈145〉	瀬戸内海の古い町	谷沢明・鈴木清・高橋建爾
〈152〉	柳井の商家と町	谷沢明
〈156〉	古い道の上の町並み	杉本喜世恵
〈191〉	出作りの村 二福島梶枝岐	須藤護・鈴木清
〈200〉	人生遊学 気仙大工探訪行	鈴木清
〈227〉	東米良の代表的すまい	谷沢明
	栃木 河岸と宿場と問屋商人のまち	谷沢明

fig.9 『あるくみるきく』における建築系コンテンツ

宮本の没後、盟友の高松圭吉(1920-2005)が所長に呼ばれ、高松は観文研の研究体勢を主任研究員を置く7つの研究分野に整え、所員たちが研究者として独立できるよう「あるく・みる・きく」から「かく・はなす・あむ」の能力を鍛えることに重点が置かれる。これに伴い、後半の〈あるく〉の面もアカデミックな傾向に推移していく。

名前	生年(没年)	最終学歴	1972年1月	
			年齢	観文研役割(得意分野)
宮本常一	1907-(1981)	大阪府立天王寺師範学校 卒業	64	武蔵野美術大学非常勤講師 所長
姫田忠義	1928-	旧制兵庫県立神戸経済専門学校 卒業	43	フリー脚本家 よろず遊軍
伊藤碩男	1933-	不明	38	カメラマン カメラマン
五百沢智也	1933-	東京教育大学 卒業	38	浪々 探検学校 ネパール氷河地帯
田村善次郎	1934-	東京農業大学大学院農学研究科農業経済学専攻修士課程 修了	36	大学講師 チーフ 探検学校ネパール
本江信子	1934-	武蔵野美術大学美術学部油絵科 卒業	20+	デザイナー デザイン
佐藤健一郎	1936-	東京都立大学大学院 修了	35	大学講師 遊軍(祭芸能)
宮本千晴	1937-	東京都立大学人文科学部人文科学科(山岳部) 卒業	33	非常勤嘱託 事務局長・編集長
須藤功	1938-	川口市立泉陽高校 卒業	33	フリー写真家 チーフ(全国の民俗の写真)
向後元彦	1940-	東京農業大学(探検部創設) 卒業	31	非常勤嘱託 チーフ
稲垣尚友	1942-	国際基督教大学 中退	28	押しかけ十鳥村編集員 遊軍 鹿児島無給駐在員
西山昭宣	1942-	早稲田大学第一文学部 卒業	29	大学院生・非常勤嘱託 マネージャー
伊藤幸司	1943-	早稲田大学文学部哲学科 卒業	28	学生(探検部・写真部) 出版(写真)
志村妙	1943-	早稲田大学第一文学部 卒業	20+	主婦(結婚後、西山妙) デザイン(郷土玩具)
柳沢正弘	1943-	早稲田大学院文学研究科 修了	28	大学院生 チーフ(八百万の神様)
山崎禪雄	1943-	早稲田大学大学院文学研究科 修了 博士課程単位取得退学	28	高校教員 (仏像、庭園)
渡部武	1943-	早稲田大学大学院文学研究科 修了 博士課程単位取得退学	28	大学院生 (仏像、博物館、千社札、旅研究)
相沢昭男	1943-	武蔵野美術大学建築学科 卒業	28	建築家 チーフ(村や町の形と意味)
三輪主彦	1944-	東京都立大学理学部 卒業	27	高校教員 地形、秩父、探検学校ホルネオ
神崎宣武	1944-	武蔵野美術大学卒業	27	神主・非常勤嘱託 チーフ・陶器収集および背景調査、探検学校ホルネオ
工藤員功	1945-	武蔵野美術短期大学芸術デザイン学科専攻科 修了	26	非常勤嘱託 竹細工収集と背景の調査、時にデザイン
須藤護	1945-	武蔵野美術大学建築学科 卒業	26	都市工学研究生 民家の調査
森本孝	1945-	立命館大学法学部 卒業	26	トラック運転手 セレベス無給特派員
成田義宏	1946-	不明	25	大学院生 地形景観
賀曾利隆	1947-	都立大泉高校 卒業	24	単車に乗った旅ガラス インド無給駐在員
神野善治	1949-	慶応義塾大学経済学部卒業	22	学生 よろず力仕事
青柳正一	1950-	明治大学 卒業	22	学生 資料整理・探検学校卒業生
曾我礼子	不明	不明	20+	フリーライター 集會司会者・アフリカ無給駐在員

fig.10 開設5年目の観文研の一部の所員(1972年1月号(59)を参考に一部情報を加えて作成)

3. 『あるくみるきく』における建築系フィールドワーク

本研究では『あるくみるきく』の中から、一つの地域において集団的にインセンティブな調査が実施された〈31〉会津〈64〉奥能登〈102〉佐渡の3つの調査に注目し、その経緯や調査方法、成果やその後の展開について歷程を追った。尚、今回これらフィールドワークを主導した武蔵野美術大学建築学科OBの相沢詔男(1943-)、須藤護(1945-)、真島俊一(1947-)の3氏にインタビューを実施し、経緯を補完した。

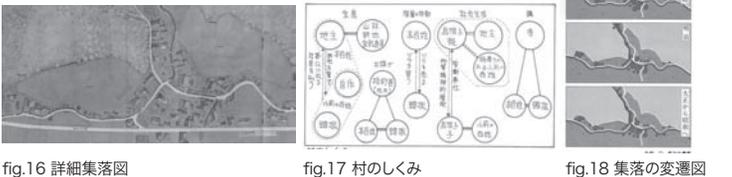
3-1. 大内・草屋根保存運動

相沢詔男は、1969年會津の大内に残る草屋根の景観を保存するために、マスコミ取材や観光客の急増で保存と開発に揺れ動く村の生活実態の把握と客観的資料による村人への再認識を目指し集落全戸を対象とした屋根伏図と平面図の詳細な実測をおこなった。その調査成果を『都市住宅』(69.12)が掲載し、抜き刷りが大内全戸に配られた。また観文研による経済構造や民俗の調査もおこなわれ、宮本も住民に街並の重要性と保存への協力を呼びかける。その後もダム工事や民宿改造など開発と保存で二分する村で相沢は奔走、1981年の伝建群指定後も村づくりに関わり、詳細な記録を「ゆいデク叢書」として自費出版している。



3-2. 奥能登火宮デザインサーヴェイ

須藤護らは学生紛争による大学閉鎖期間に有志14名で奥能登・火宮でデザインサーヴェイを実施(1970年7月27日-8月24日)。調査体勢は、実測班の建築専攻の学生の他、成田闘争に参加していた商業デザイン科や工芸科の学生が村のしくみを調べる社会班を組織し2班で調査。調査中2班は目的ら度々衝突するも、激励に訪れた宮本が「なぜ民家は大小関わらず同じ間取りなのか」とう学生の疑問に実測班と社会班の成果をもとに解説することで体勢がまとまる。この調査によって畦道や水路を含む詳細な集落配置図や建物図面の他に「増改築・新築年表」や「集落の変遷図」などが製作され、村落社会の階層と民家や集落構造の相関関係を明らかにされた。



3-3. 佐渡の漁村悉皆調査

1968年春、学生紛争で大学閉鎖中に真島たち数名は、デザインサーヴェイに感化され、佐渡小木岬の白木村を訪ね、合宿しながら集落立面図などを作成する。その話を聞いた宮本は大学内で真島を訪ね「浪人して研究を続けろ」と助言、真島は仲間とともに卒業後にTEM研究所を結成、民家を借りて共同生活を営みアルバイトで稼いだ資金で繰り返し佐渡へ通い調査を続ける。1969-71年に宿根木の民家・集落調査、1971-73年に琴浦の調査、1973-75年には船大工との交流から和船の実測・復元研究など、漁村に滞在しながら建物内の生活財や漁具を徹底的に記録し、漁村の生活を総合的に把握した。「参与観察」を通じた地元住民との交流から、民俗博物館の設立や、宿根木の景観保存の為の民家の改修、千石船の復原など、実践へ展開した。



考察

4. 在野の人的ネットワーク

4-1. 今和次郎との共通性

『あるくみるきく』における建築フィールドワークには「建築物だけでなく道具や微細な事象も全て記録する」という調査手法が共通しており、澁澤から継承した宮本の民具研究からの影響と考えられる。そのような調査手法は、戦前に全国の農山漁村を歩き無名の民家を採集した今和次郎にも共通性を見出すことが出来る。今和次郎は1922年に刊行した『日本の民家』初版前後、白茅会・郷土会の活動を通して柳田から知遇を得つつ小田内通敏(1875-1954)など人文地理学から影響を受け、初版(考現学)以降は柳田に一定の配慮を配りつつ民俗学と距離を保ち、考現学による「一切しらべ」の手法を民家採集に取り入れていった。その視点は、生活的視点が特徴であったが、建築構造の原形への復原を標榜する戦後の建築史学の民家・集落調査において、今和次郎らによる戦前の民家研究は未体系のものとして置き去りにされてきた。



fig.20 今和次郎による断面スケッチ

4-2. 在野のフィールドワークの手法形成と人的ネットワーク

このような建築史的評価に対して本研究では考察として、今和次郎と宮本常一(門下)の間に形成された人的ネットワークを紐解いた。(次頁)1968年宮本は「地方文化の新時代」と題した京都新聞内の座談会で今和次郎の弟子・川添登(1926-)や社会学者・加藤秀俊(1930-)と対面し、『Energy』や日本生活学会を通じて親交を深めた。また宮本は弟子である相沢・真島・須藤の3氏を川添に紹介、川添は吉阪隆正(1917-1980)とともに在野で活動する彼らを物心両面から支援していた。今回インタビューを通じて、TEM研究所の道具に注目した調査は、大学の先輩・大竹誠(1944-)ら遺留品研究所の都市調査への参加から「状況証拠としての物への注目」に影響を受け、また道具の調査を民家から集落一帯に展開するアイデアには『日本の都市空間』(1965年)を共同編集し武蔵美大講師だった山岡義典(1941-)による助言があり、1/10の縮尺で実測する手法は、船の木割を研究する石井謙治(1917-)による板図の助言によるものであったことが明かされた。また真島は「デザインサーヴェイ連絡協議会」を共同運営し、年に1,2回、デザインサーヴェイをおこなう全国の研究室が集まって情報交換や調査手法の発表をおこない、伊藤ていじや宮脇壇のほか、吉阪や今和次郎もシンポジウムに参加したという。また須藤が観文研閉鎖後に放送大学の研究職に就いたのは加藤秀俊からの紹介があったと言う。相沢は後年、田中文男(1932-2010)と対面した時、自らの意志でおこなってきた大内の保存運動を高く評価していた事を告白し、その場に居合わせた稲垣栄三(1926-2001)らを強く叱責したと言う。

4-3. 在野に伏流する視座

田中の叱責は、建築史学の「報告書を出したら終わり」という官学的な姿勢に対する発露であった。一方相沢のように、誰に頼まれるでもなく地域を訪ね、生活者の視点から民家や集落を調査した在野のフィールドワークには、今和次郎以降在野において共通して継承されてきた問題意識があった。それは地方の生活者の暮らしを立てる為、〈建築物だけでなく道具や微細な事象もすべて記録する〉という立脚点のもと、宮本の言う「生かされる資源」を見出すことに視座があったと言える。

結論

以上のような人的ネットワークをそれぞれ考察する事で、今和次郎から宮本常一門下まで在野のフィールドワークに通底する〈建築物だけでなく道具や微細な事象もすべて記録する〉という立脚点と実測技術が、建築史はもとより建築一分野の素養だけでなく、在野の活動体による柔軟で重層的な人脈形成によって培われてきたことを明らかにした。以上のように本研究では、今和次郎の民家研究から建築史学の傍流に脈々と受け継がれてきた「生活」的視野と「建築」的技術の往還という問題意識と視座にこそ、建築史学における文化財保存から一つ先のフィールドワークの道筋があるのではないかと提起した。

謝辞

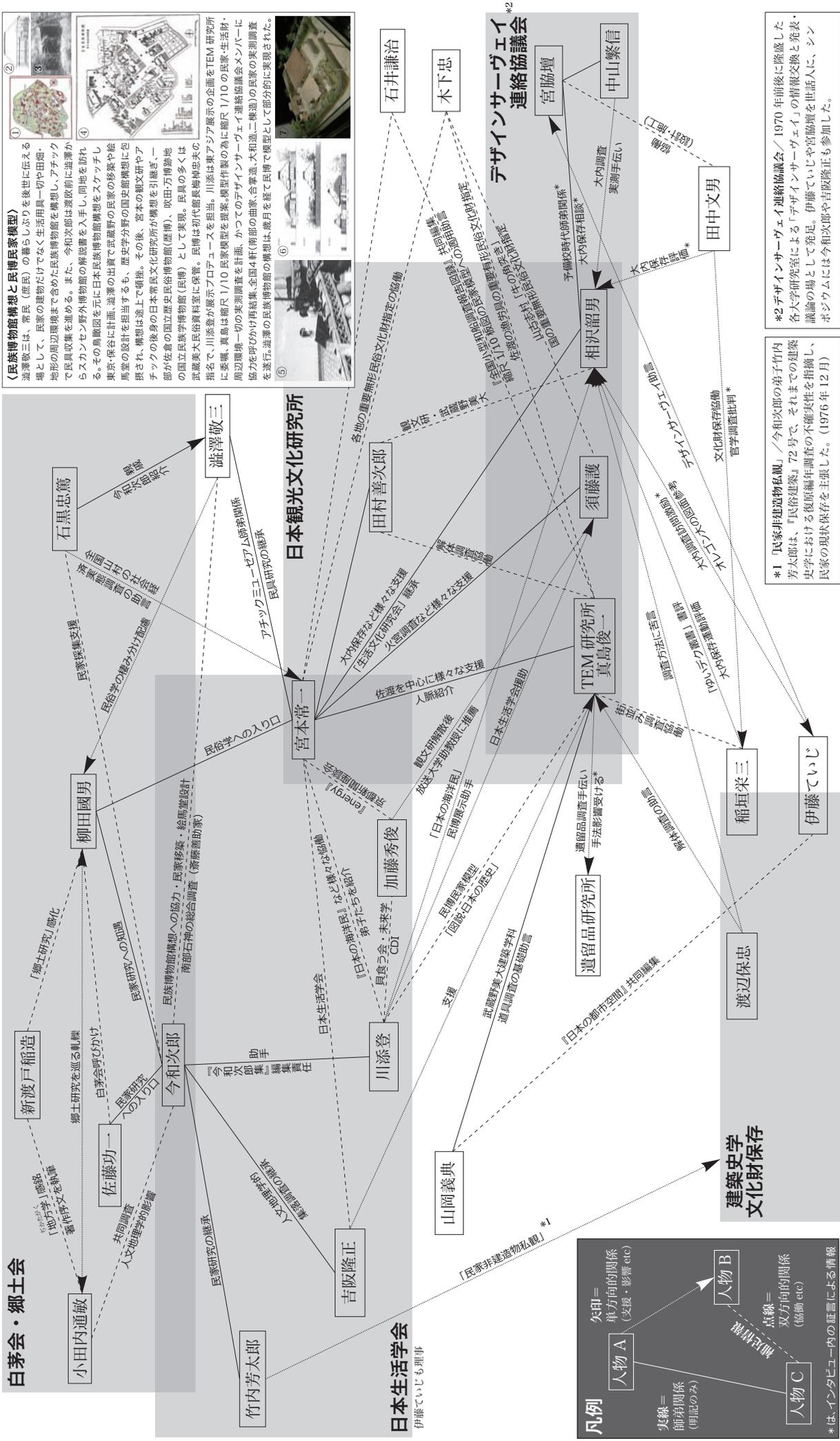
『あるくみる きく』の閲覧をはじめ観文研に関する助言や資料提供など多大な協力をして下さった民俗写真家の須藤功氏に厚く御礼申し上げます。須藤氏の御厚意なくして本研究は成立しえませんでした。また、インタビューを受けて下さった武蔵野美術大学教授の相沢昭男氏、龍谷大学教授の須藤義氏、TEM研究所所長の真島俊一氏も、大変貴重な話をいただいたき、資料等を提供してくれました。その他、カメラマンの伊藤碩男氏、日本民族文化映像研究所名誉所長の姫田忠義氏、(株)グループ現代会長の小泉修吉氏、武蔵野美術大学教授の神野善治氏など観文研関係者との周辺の方々に多くの助言と激励をいただきましたことをここに記します。

註

註 1. 日本建築学会家小委員会「復原調査および編年(案)」(『建築雑誌』日本建築学会 1963)にあるように、痕跡を調べ復原図を作成することによって古い形式を多く持つ民家の編年表をまとめ、民家の様式の変化と伝播を研究することが重要な役割を果たすとされた。この案を土台に作成された1966年文化財保護委員会監修による『民家のみかた』調べたは、全国家際調査において手引書となった。2. 1975年文化財保護法改正により開設された「伝統的建造物保存地区」の制度は市町村の申し出により、国が選定し、専門家による技術的指導で街並みの保存がされた。3. 脚録達 2005 『民家研究 50年の軌跡と民家再生の課題』配布資料『2005 年日本建築学会大会 歴史・意匠部門 パネルディスカッション』日本建築学会 / 4. 1917年、民家の研究を目的に、花菱功一(1878-1941)の呼びかけによって柳田國男や、今和次郎、石黒忠篤、大熊野辰、渡辺保忠の目録、評論書『民家の研究』が発表され、茅がたれで白くなるのちをなで『民家』と各付られた民家研究グループがつくられた。5. 日本建築学会家小委員会 1955.7 『民家研究の成果と課題』日本建築学会昭和30年度春季大会専門別研究協議会(歴史の部)記録-『建築史研究 21号別冊』建築史研究会 p.4 / 6. 1925年渡辺政三により設立された民家・民俗資料の収集・研究、漁業・水産史の研究を中心とした民間研究所。初め、渡辺保(東京深川)の物質の2階に生物の標本や郷土玩具などの民家を集め、同好の士と研究をはじめたことからアチック・ミュージアム(屋根裏博物館)と名づけられた。42年、官憲の干渉・査察が著しくなったため、英語の研究所名から日本常民文化研究所と改称された。7. 柳田は民俗調査で収集すべき民俗資料を、祭りや儀礼など目に見えて誰でも採集できる〈有形文化〉、音として伝承可能な〈言語芸術〉、最終段階として観察する郷土人による〈心象現象〉の〈三段階〉に分類し、その中でも民間伝承による心象現象を目指した。8. 研究心に富んだ農業家。9. 宮本常一 2005 『忘れられた日本人』岩波文庫 p.214 / 10. 宮本 1964 『日本列島にみる中央と地方』宮本常一著作集2 『日本の中央と地方』未来社 p.46 / 11. 谷沢明 2009 『宮本常一の親文化論』現代社会研究科研究報告 愛知学院大学現代社会研究科研究報告 p.2 / 12. 武蔵野美術大学の研究室に話を聞きに来る内外の学生が多いため、目下自ゼミとして週一回、研究会をもち、有形文化、民家の研究をおこなった。13. 日本観光文化研究所編 1989 『観文研 二十三年のあゆみ』近畿日本ツーリスト発行 p.15 / 14. 前掲 13 / 15. 宮本 1956 『全国郷土年表』岩波文庫 p.344 などがある。16. 佐藤功一 『日本の民家』未来社 p.58 / 17. 佐藤功一 『日本の民家』未来社 p.58 / 18. 須藤功 『あるくみる きく』No.100 近畿日本ツーリスト・日本観光文化研究所発行 p.109 / 19. 『この宿場、ぜひ見て!』朝日新聞 1969年6月25日 / 20. 相沢昭男 『ゆいデク叢書』は2013年2月現在、ゆいデク叢書 01 『大内の暮らし』ゆいデク叢書 02 『村への提案』ゆいデク叢書 03 『開闢の遺産』ゆいデク叢書 04 『この宿場、残して!』が発行済 / 21. 須藤氏のインタビューによれば、社会動向が変化した相子親と鳥相子の階層が寄り合いによって変動する上に、同じ年中行事がおこなわれるため関わりも同じ、所有する道具の量と労働力によって上下の相互扶助がおこなわれていたこと。22. 真島俊一 1981.6 『宮本先生とTEM』『生活学会報 18号』VOL.8 No.2 日本生活学会 p.81 / 23. 参与観察は、文化人類学などにおける定性的社会調査法のひとつ。研究対象である社会や集団に調査者が加わり、生活をともにするなどして、観察を行い、一次資料を収集すること。24. 前掲 4 / 25. 明治 40 年頃から後援者である新渡戸稲造の自宅で開かれた郷土研究会。柳田が幹事役として小田内、牧口常三郎、石黒忠篤、今和次郎が参加した。26. 今和次郎は民家調査のはじめ小田内とともに行動をともにすることが多かった。27. 今和次郎における評価として、藤原照良 1989 『解説』今和次郎 『日本の民家』岩波文庫 p.344 などがある。28. 宮本常一 川添登・加藤秀俊・川島二郎 『地方文化の源流』(京都市新聞 1958年1月26日 8面) / 29. TEM 研究所研究報告 1978.10 TEM 研究所発行には宮本常一他に川添登と吉阪隆正による推薦文が掲載され、3者とも TEM 研究所の株主であった。30. 遺留品研究所は、武蔵野美術大学磯崎新ゼミの大竹謙や中村大助、真野智治、村田憲亮らが設立し、1968～74年に都市に残されたながらも生き続けるテクスチャを身近な都市に求め、調査・記録・研究を重ねた。

図版出典

- fig.1 『宮本常一』『忘れられた日本人』を訪ねて(別冊太陽 日本のこころ 148) 2007年 平凡社
- fig.2 須藤功氏提供
- fig.3,6,7,9,10 筆者作成
- fig.4,5 筆者撮影
- fig.8 エッソ・スタンダード石油株式会社 『Energy 35』
- fig.11 朝日新聞 1969年6月25日
- fig.12 『都市住宅』6912
- fig.13 須藤功 『写真でつづる宮本常一』未来社
- fig.14 相沢昭男 『ゆいデク叢書 02 村への提案』1999年 ゆいデク有限公司
- fig.15,16,17,18 『あるくみる きく』63号 近畿日本ツーリスト・日本観光文化研究所
- fig.19 『あるくみる きく』102号 近畿日本ツーリスト・日本観光文化研究所
- fig.20 今和次郎 『日本の民家』第五版 1989年 岩波文庫
- ① ② ③ 神宮川大学日本常民文化研究所・横浜歴史博物館 『根拠の博物館—民家史研究—』(京都市新聞 2002年 横浜歴史博物館)
- ④ 『季刊 民家学』12 国立民族学博物館
- ⑤ 『季刊 民家学』12 国立民族学博物館
- ⑥ 『季刊 民家学』12 国立民族学博物館
- ⑦ 国立民族学博物館提供



*2 デザインセンター「デザインセンター」の情報は、伊藤ていじや宮協協を世話人に、シンポジウムには今和次郎や吉阪隆正も参加した。

*1 民家非建造物私観 / 今和次郎の弟子竹内芳太郎は、『民俗建築』72号で、それまでの建築史学における復原編年調査の不確実性を指摘し、民家の現状保存を主張した。(1970年12月)